
好き好き

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

好き好き

【Nコード】

N1588D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大阪の材木商松前屋辰五郎。江戸に来たついでに吉原で遊郭遊びをしようとするが。江戸時代ではこうした遊びも普通にありました。

第一章

好き好き

江戸時代の吉原。ここは今宵も賑わっていた。

遊女達と酒と絢爛にその身を浸したい者達が集いそこで溺れている。たまに他の場所から来た者も物見遊山で来ていたりする。松前屋辰五郎もそんな一人であった。

大阪で材木商をやっている。大阪は八〇八橋と呼ばれる程橋が多い。それだけ大阪に川が多いということであるがそれだけに何かと材木は入用であった。だから彼の商売はかなり繁盛していた。特に台風の後で橋が倒れていた時は儲かるのであった。

「わての商売はあれでんねん」

自嘲して自分をこう言うことが多かった。

「因果なもんで。人様の不幸で成り立ってますねん」

台風の度に儲かるからだ。普通大阪で橋の普請は豪商達が受け持つ。その費用で傾く家も多かった。その為に「杭倒れ」と言ったりもしていたのだ。

ところが彼の家は違っていた。その度に儲かる。だからそんな自分を自嘲しているのである。だがそんな彼だがしつかりと人様の家の普請にも役立っている。何だかんだで人のいい彼は人様の役になり役立っているのであった。

その彼の好きなのは酒と女だ。特に女は好きで女房の目を誤魔化してはいつも遊郭で遊んでいた。この吉原にしても一度行ってみたりと思っていた。商いで江戸に下ったのを幸いに今こうして来ているのである。彼にとっては夢が適ったということである。

夢が適ったがまだ相手が決まっていはいない。何処に行こうかとあれこれ探している最中であった。吉原は店が多い。だから一つを選ぶのにも随分時間がかかるのだ。

その中の一店の前を横切ると。不意に客引きの若い男が声をかけ

てきた。

「旦那旦那」

「何でんねん」

辰五郎はついつい男の方を振り向いた。

「いい子がいますよ」

「どんな子や」

「いや、それがね」

既に男の話術の中に入っていた。

「一度御覧になられますか？」

「そんなにええ娘やったらな」

ここで言葉のニュアンスに少し齟齬があるのだが二人はそこに気付いていない。

「見せてもらえるか」

「こちらで」

入り口の遊女達を指差す。その真ん中にいる者であった。

「おおっ」

「如何でしょうか」

答えはもう辰五郎の驚きの声でわかっていた。

「この子は」

「ええな」

見れば大阪にもこんな遊女はいない。とびきりの美女であった。

可愛さと妖艶さを併せ持った、見たこともないような美女であった。

「この娘は」

「じゃあこの子で決まりですね」

やはり言葉のニュアンスが違っていた。だがお互い気付いてはいない。

「ではお店へどうぞ」

「わかりましたわ」

辰五郎は上機嫌で店に入った。店の中は遊郭独特の爛熟でいて退廃的な空気に満ちていた。彼はその雰囲気を感じるだけでもうつき

うきとしていた。

「吉原はちよつとちやいまんな」

案内をするその若い男に言つのだった。

「やっぱり」

「そうなんですか」

「言葉でわかると思いますけれどわては大阪から来ましてん」

それも言つ。

「大阪もええですけどどここも」

「御気に召されましたか」

「はい」

辰五郎はその言葉に笑顔で頷く。

「何か中にいるだけでええですわ」

「ここはまた違うんですよ」

男はまた言つてきた。

「それはお楽しみを」

「違うんでつか？」

「そうですね」

また言つ。

「そこもお楽しみを」

「それじゃあ」

部屋に入る。そこにはあの遊女がいた。花魁のあの華やかな服を着てそこにいた。まずは話を楽しみ酒を嗜んだ。話は実に弾んだ。

第二章

「江戸の生まれか」

「あい」

女はにこりと笑って辰五郎の言葉に答えた。

「訳あってここにいてるんでありやす」

「へえ。まあ人それぞれやしな」

ここに来るといふのは碌な理由ではないことはもうわかっていた。売られてここにいてるからだ。吉原にしてどの街の遊郭にしるそうなのだ。いる女は入る前も入った後も彼女達にとってはいいことはない。絢爛の裏には深い闇があったのだ。

辰五郎はあえてその闇を見ようとはしなかった。表の絢爛を楽しむことにしたのである。陽気な彼はそうしたものを見るのを好まなかったのだ。

「それでや」

「あい」

話を続ける。

「歳は幾つや」

「十五になります」

そう話してきた。何か妙に女にしては低く太い声にも感じた。

「十五か」

「そうでありんすが」

「いや」

辰五郎はもう一度女を見た。見ればその歳にしてはやけに大きく見えた。

「背が高いと思いませんか」

「そうでありんすか？」

「言われまへんか？」

そう彼女にも問う。

「いえ、全然」

「そうでつか。ならええですけどね」
「釈然としないまま答えるのであった。そうして酒がなくなつたところ
で灯りを消しいよいよ床に入るのであった。」

床に入り着物を脱がす。そうして最初に胸に手をやる。ところが。
「!？」

ないのである。胸が全然ないのだ。

「これは一体」

「どうしたでありんすか？」

「あつ、いや」

辰五郎は驚きを隠せない。そうして下に手をやった。

するとあつた。彼と同じものが。彼は手に触れた二つの官職を味
わい仰天した。そうして服を脱ぎかけたままでさっきの店の男のと
ころに飛び込んだのであった。

「どうしました、また」

男はそんな辰五郎の姿に目を丸くして問うた。

「えらい格好ですけど」

「えらいも何もあるかい」

辰五郎は狼狽しきつた顔で彼に述べた。

「何やあれは、男やないかい」

「何やもあれもそうですよ」

男は平然とした顔で辰五郎に答えるのであった。

「だってここはそういう店なんですから」

「えっ!？」

これは流石に思いも寄らぬことであつた。男の店だというのだ。
辰五郎は目を点にさせた。そうしてまた男に問うのであった。

「男やて」

「そうですよ、ほら」

男は笑顔で辰五郎に述べる。その前に。

「まずは服をなおされて」

「おっと」

気付けば彼の服は脱ぎかけで散々に乱れていた。それをなおさせたのである。

辰五郎が服をなおしてから説明する。つまりは。

「お侍さんに多いんですけれど」

「ああ、江戸は多いんやっただな」

江戸にいる者のうち半分は武士であった。それとは違い大阪では武士は殆どいない。五十万はいたと言われる大阪だが武士は数百人程度しかいなかったのだ。その為武士というものを一生見たことがない町人すらいたのである。

「そうです。お侍さんでもそうですしそれに影響を受けた方々も」

「そっちの方もってことでんな」

「大阪ではそんな店はないですか」

「あらしまへん」

興味がないので気付いていないだけかも知れないが少なくとも彼は知らなかった。

「初耳ですわ」

「そうですか。それはいい」

「何がええねん」

思わずこの言葉が出てしまった。偽らざる本音である。

「何で男なんかとなあ、一緒に寝なあかんのや」

「いやいや、それがですな」

男はそんな彼に楽しそうに言うのだった。

「これがかかりいいのですよ。まあ試しに」

「寝てみるっていうんか？」

「はい、是非どうぞ」

笑顔で勧めてきた。

「損はしませんよ」

「そもそもお金も払ってるさかい」

大阪人らしく金に五月蠅い彼はもう払っているのならば元は取り

好き好き

たいと思っていた。そしてそれを実行に移すつもりだったのだ。

「ほなええか」

「宜しいですね」

「だからや。お金払ったから」

理由はそれにつきた。少なくとも自分を納得させた。

第三章

「続けるわ。ええな」

「はいどうぞ」

笑顔で言ってきた。

「そのように」

「しかし。難儀な話やで」

彼は部屋に戻る最中でも困惑した顔で呟くのだった。さつきは朗らかに昇った階段が今では異常に重い。足が動いてくれない。

それでも元を取らないといけなから部屋に戻った。何とか平静を装って女だった筈の若衆に声をかけるのだった。

「あの」

「ほな、はじめよか」

声も何とか抑えて言う。

「心配させたようやけれどな」

「いいんでありんすか、あちきで」

「ええ」

覚悟を決めていた。

「そやから。今からな」

「あい」

若衆も頷いた。こうして辰五郎ははじめての味を知ったのであった。

大阪に帰ってから。彼は臍履にしてくれる客人と飲んだ時にこの話をしたのであった。この時彼は好きな酒のせいでやけに上機嫌であった。

「江戸にそんな店があるんでっか」

「そうでんねん」

お座敷であった。そこで二人で馳走を食べていた。大阪でよく食べられている牡蠣を料理したものだ。それを天麩羅にしている。他

には刺身もあつた。そういつたもので美味しい酒を楽しんでいるのである。海の近い大阪ならではの料理であつた。

「稚児遊びというやつでんな」

「そう言うんでっか」

辰五郎はその言葉を知らなかつた。はじめて聞いて目をしばたかせたのである。

「あれは」

「知りまへんでしたか」

「はあ、全然」

次には首を傾げさせて述べた。

「そんなんがあること自体」

「大阪でもありませんで」

客はそう彼に告げる。

「れっきとした店が」

「そうでしたか」

本当に知らなかつた。そんなものがあるとは本当に夢にも思わなかつたのである。

「それはまあ」

「いや、ええこと知りましたな」

客は今度は好色な笑みを浮かべて彼に言うのであつた。

「その遊びをお知りになつたつていうんは」

「それでっか!？」

だが辰五郎はその言葉には甚だ懐疑的であつた。

「わてはそれはあんまり」

「好きになれまへんか」

「はあ」

困つた顔で述べる。

「どうにもこうにも。やっぱり女の方がええですわ」

「まあそれは仕方ありません」

それでも客は彼の言葉に納得するのであつた。

「それについては。好みですさかい」

「あの柔らかい胸と」

彼はそれについて話を始めた。自分の好みについて。

「あとは下も」

「それ以上はえげつない話になりますな。しかしそれでしたら」

これ以上は話すのを止めることにした。どうにもこうにも品がなくなってしまうからだ。それで客は彼にあることを提案したのであった。

「今から」

「どするんでつか？」

「どうでつか。そっちの店でも」

また好色な顔をして彼に提案する。

「そっちの方が好きでしたら」

「ああ、ええですな」

辰五郎も好色な笑みになった。これで決まりであった。

「ほな今から」

「はい。では」

こうして彼等は二人で遊郭に繰り出すのであった。辰五郎にはどうにもこうにも忘れられない江戸の吉原であった。好きにはなれなかった。しかしいい経験であり思い出とはなったのであった。どうにもこうした好みは難しい話のようである。

好き好き 完

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1588d/>

好き好き

2009年3月24日09時22分発行